

くらしと協同をたずねて

「手ざわりのある情報技術」としての新聞
— 日刊新聞 150 年の歴史と AI 時代の挑戦 —

尾高 泉（ニュースパーク＜日本新聞博物館＞館長）

紙の新聞、デジタルの新聞、
ネットニュースの中の新聞

明治 3 年 12 月 8 日（新暦 1871 年 1 月 28 日）、開港地・横浜に初の日刊新聞「横浜毎日新聞」が創刊されてから、この 1 月末でちょうど 150 年たった。当館はその縁で、横浜開港資料館（日米和親条約締結の場所）のすぐそばにある。「情報と新聞」の博物館として、歴史と現代の両面から、「確かな情報を見極める力」の大切さと新聞・ジャーナリズムの役割を伝えている。来館者の半分は小中学校の校外学習などの団体来館であり、社会教育施設として教育事業も強化している。

本稿は、AI と人間の関係を多面的に考える中で「手ざわりのある情報技術」の一つとして「新聞」について書かさせていただく。当方に期待されているのは、デジタルでは得られないアナログ媒体としての「紙の新聞」の魅力であり、それを新聞の歴史、多くの人に読んでもらうための業界の取り組みなどと併せて紹介することだ。しかし、未来を担う次世代のために書こうと思えば、それを単純な図式で楽観的に書くことは難しいということを最初にお断りしておく。

当館常設展示の「情報社会と新聞」ゾーンには、人類の情報化の歴史を映像と音で体感できる「情報タイムトンネル」がある。紀元前からの粘土板、パピルス、伝書鳩、

木簡、羊皮紙、駅伝、紙の誕生と伝播に続き、グーテンベルグによる活版印刷技術の発明、郵便事業の登場、定期刊行物の登場、日刊紙の誕生、写真技術の発明、そして電気通信、ファクシミリ、電話機、映画、無線通信、ラジオ、テレビ、インターネット、それぞれが誕生する時間軸を理解する展示だ。インターネット登場以降、情報量が爆発的に増え、私たちが大量の情報の海の中にいることが実感できる。新しい情報技術には、常にそれを使いこなす時間があり、世代を通じて情報リテラシーが伝授されてきたが、インターネットの登場以降、変化の速度と量が大きすぎて、もはや親から子供に伝えられなくなっている。私自身の子育てもそうだった。

いまや第 4 次産業革命が進行し、デジタル技術、とりわけツイッターや LINE、インスタグラム、フェイスブックといった SNS（ソーシャルネットワーキングサービス）によって、情報はメディアから受け取るものではなく、誰もが受発信できる時代になった。新聞社自体も、社によって濃淡はあるが、ブランクセット判の紙面だけでなく、有料・無料のデジタル新聞（電子版）を 24 時間運営する。一方で、ネットニュースにも配信し、SNS を使って読者との関係（エンゲージメント）強化にも力を入れている。ネットニュースの利用者は、記事の配信元が新聞社か否かを自覚しないまま、情報を無料で消費し、情報はどんどん

コモディティー化している。最近では、紙面よりも先に電子版にニュースを流したり、グラフィックスや映像を駆使したイメージなデジタルジャーナリズムの手法を強化したりする新聞社も増えつつある。新聞購読家庭の減少により、若い世代を中心に、紙の新聞と縁のない人々が増えている。若い人を中心に、スマートフォンで斜め読みする「スクロール文化」が広がるいま、紙の新聞が「手ざわりのある情報技術」であることをどう説明すればよいだろうか――。当館が日々直面する難問でもある。



（写真1）水野年方「号外」（当館所蔵）

日本の日刊新聞発祥の地、横浜から

まず、日本での新聞の発達と印刷文化の発達は不可分の関係にあること、近代国家を目指すなか、印刷技術の発達が広く多くの人に均一の情報を届けることを可能にして、社会変革を導き、印刷メディアが社会に大きな影響力を持ってきたことを共有したい。

開港まもない横浜には、かわら版や英字紙や海外事情を翻訳して紹介する和紙の冊子型の新聞が現れた。ヒト、モノ、カネの集まる横浜が「情報」の集積地になり、必然的に新聞が誕生した。明治3年は、西洋、中国、長崎を経て横浜に活版印刷と活字鑄造技術が伝わった年でもあり、洋紙1枚に両面刷りした日刊紙の誕生は近代新聞の始まりを告げるものだった。同紙は生糸の取引価額や外国船の入港時刻など貿易に関する商況も広く伝えた。明治10年ごろまでには、現在に続く新聞も各地で多く誕生し、明治期の社会の大きな変化と新聞の誕生・発達が不可分であったことが自然と理解できるだろう。

写真①は、雑誌『文藝倶楽部』の明治37年（1904）年6月発行号に「号外」というキャプションで掲載されたもので、ニュースをいち早く伝えるために発行された号外を熱心に読む女性が描かれている。後ろを振り向かず左手でふすまを開めているところから、女性が読み入っている様子がわかる。どこかスマホに見入る現代人の姿にも重なる。

当館では明治以降、デジタル化による情報社会の現在まで、一貫して新聞が「伝える」役割を担い続けてきたことを紹介している。政党機関紙だった新聞がニュースを重視する報道新聞に変化するなかで、記事だけでなく、漫画や絵図、写真と表現も多彩になった。例えば、明治21（1888）年7月の会津磐梯山の噴火時、創刊まもない東京朝日新聞は、すぐ現地に記者と洋画家の山本芳翠を派遣、山本が直接版木に写生し、版画家の合田清が彫り上げた版画を附録として印刷した。写真以前の速報ビジュアル災害報道である。

いまや世界共通語になった「MANGA」も、コマ割りした「漫画」は、もともと

は新聞から生まれたもの。明治 15（1882）年に時事新報を創刊した福澤諭吉は、欧米の新聞を参考に、記事の理解を助けるようにと紙面に絵を載せることを推奨、この流れで今の 4 コマ漫画の原型とも言える「無限の運動」が同 23（1890）年 9 月 27 日付同紙に掲載された。やがて人々の関心を集め新聞漫画も人気を得ていき、現在のような 4 コマ漫画の連載につながっていった。

明治政府が帝国議会を開設後、その議事録を印刷するために輪転機導入を計画し、官報局長を渡仏させた際に、朝日新聞の技師長が同行した。これが契機になり、明治 23 年に東京朝日新聞がフランスマリノニ社から輪転機を輸入、日本での生産も始まり印刷機の性能が上がり、早く正確なニュースを大部数で届ける体制が整っていった。

大正時代には、新聞社は企業としても発展し、今に続く世界に類を見ない戸別配達網を整えていき、広告、事業などの活動も活発化、マスメディアとしての新聞の社会的影響力が高まった。その後の戦時統制期には、新聞は言論統制を受け、戦時体制に組み込まれていく一方で、自らが戦争協力するようになった。昭和初期に 1208 紙あった新聞は、昭和 17（1942）年の一県一紙の新聞統合で 55 紙にまで減ってしまったが、戦後、新聞は民主主義を支えるメディアとして再出発した。以降、政治や社会の在り方を多面的に報じ、自然災害の多いこの国では、人々の暮らしを支える重要な役割も担ってきた。

明治時代も今も、「知りたい」という人々の思いは同じである。とりわけ日本は、約 96% と世界に類のないほどの戸別配達網が確立されている国で、一日に全国で約 3500 万部の新聞が発行されている。当館には毎日、運営元の日本新聞協会加盟の新



（写真 2）全国 103 社の約 135 紙が
1 週間配架される当館の新聞閲覧室

聞 103 社から約 135 紙が届き、直近 1 週間分を閲覧室（写真②）に配架しているが、そのインキの匂いと港からの汽笛の音を感じると、一日として同じ紙面なく、各地の新聞が紙齢を絶やさず読み継がれてきたことに深い感慨を抱く。

スマホ全盛時代の 「手ざわりのある情報技術」とは

さてお題の「手ざわりのある情報技術」である。「手ざわりのある」が「懐かしい」と感じる経験的な感覚を含むのであれば、今の 20～40 代前半にとっては、紙の新聞は「手ざわりのある」と思うものだろうか。紙の新聞に縁のない若い人が増えている。

とりわけ SNS 社会の中で、若い世代には、スマホで人とつながることが、双方向で共感性があり、編集アルゴリズムによって、自分好みの情報やリコメンド情報を表示してくれる情報空間の方が「心地よい」のではないか、という気もする。

特に最近はメディア側も、人々の移動中にも情報を届けようと「音声」でコンテンツを流すことに熱心だ。拙宅にある AI スピーカーも、家人が照明やエアコンのスイッチだけでなく、ニュースや音楽配信の

サービスまで組み合わせたところ、その時々気分合った音楽がかかり、朝は目覚まし代わりに、NHKや全国紙のニュースが流れてきて、一部はロボットが読み上げている。話せば返事もするしなんだか温かい。コロナ禍の制約の中でも、オンラインの会合で、これまで縁のなかった人に出会えた人もいる。今年に入ってから、米国から「Clubhouse」という声だけの無料交流メディア（プラットフォーム）が登場し、当方も試してみたが、なるほど、ラジオやポッドキャストと同様、確かに声メディアは温かいと感じさせる。

SNSはまた「感情」がむき出しになるメディアでもある。山本龍彦慶大教授（憲法）は、2020年12月15日付朝日新聞で、「SNSの中では、『言論』として蒸留される前の『感情』が吐き出され、報道機関などの社会的・専門的な媒体を経ずに公共空間に垂れ流される」「テレビや新聞といった旧メディアも、今やネットでの反応を無視できない」と指摘している。匿名の空間なのに、感情がむき出しになることによって、肌感覚に近いメディアとしてとらえられるという側面もあるようだ。

一方で、若い人の中に、全国各地で「ローカルメディア」と呼ばれる洗練された紙メディアをつくり、人と地域のつながりを生み出している人たちが増えている。当館ではこの潮流をとらえて、2019年秋に企画展「地域の編集 ローカルメディアのコミュニケーションデザイン」を開催し、全国から100点以上を集めて、各地の地方紙の役割とともに、読者との新しいコミュニケーションの仕掛けづくりと紙メディアの可能性を考察した。そこには、若い人の間に、万年筆、バリスタが手でいれるドリップ珈琲や文房具、紙の地図へのこだわりが増していることと共通する潮流がある。

TOKYO ART BOOK FAIRや紙博、文房具博などのイベントは若い人で溢れている。彼らがデザイン性の高い紙メディアを愛着のあるモノ（雑貨）としてみていることが想像されるが、残念ながら、そこに「紙の新聞」は入っていないようだ。

SNSの利用は、コロナ禍によって高齢層にも急速に広がっている。博報堂DYメディアパートナーズメディア環境研究所がコロナ禍に定点観測した「メディアニューノーマル調査」（2020年1月、5月、9月の実施）によると、リモートワークやキャッシュレス決済などの生活のデジタルサービス利用が全年代に一気に広がったことと併せて、高齢層が多様なスマホ行動をするようになったという。60代の約7割がスマホでニュースサイトやアプリを利用、5割が無料動画を、3割がスマホでSNSを利用している。端末の種類を問わずにSNSの利用状況をみると、60代の6割以上が何等かのSNSを利用、4割が2つ以上のサービスを使っている。

また、AIとメディアという視点では、AIが障がいのある人の情報接触をサポートしたり、経営効率上、新聞社の取材編集を省人化してサポートしたりする利点もある。ネットにあふれる誹謗、中傷を含む情報を人々の目にふれないように「非表示」や削除の処理をしているのも、AIだ。

紙の新聞の「手ざわりの良さ」

その中で、当方が体感してきた「紙の新聞の良さ」を幾つか挙げてみる。

まず、未知の物事と偶然出会える「セレンディピティー」がある。紙の新聞の中身は古いと言われるが、過去の紙面からだって“自分にとって”新鮮な発見をくれる記

事は沢山ある。デジタル時代のメディアには、前述のとおり、文字や写真、図表、動画に音声まで加わり、受け手は移動中にまで細切れにそれらを消費する。情報は多すぎて、しかも、メディアが直接発信した一次情報でなく、自分の SNS のアカウントに、自分がフォロー（登録）した著名人や友達の投稿が流れてきてニュースを知ることが増えてきた。編集アルゴリズムによって、検索や通信販売サイトで閲覧した商品やサービスから紐づいて、自分の関心や好みに近いものが推奨される様は、まさに「ニュースや広告から私たちを探して届けにくる」時代だ。ある新聞社の電子版でも、予め関心のあるテーマを登録することで「AI 推薦」記事が表示される。それはとても便利で、ある意味心地よい。各種調査機関の調査結果からも、若者層が、興味ある情報が常に手元にあるように、快適な自分だけの情報圏を作り意思決定を高速化していることが指摘されている。しかし、それには必然的に偏りが生じる。紙の新聞は、一見、関心ある記事を探したい人には「非効率」で「不便」なものだが、15 段や見開き 30 段のサイズで、見出しが目に飛び込んできたり、関心のない領域の記事に出会ったり、無意識だった関心領域を顕在化してくれたりする。この実感は、経験した者にしかわからない。

異論や多様性と出会う場としての紙面は、社会的包摂の場でもある。編集アルゴリズムによる、自分好みの情報が集まる SNS の心地よさは、同質であるゆえに排他的になりがちで、分断を生み易いことは、米国大統領選挙をみても明らかである。個々が得ている情報は交わらず、それぞれが見たものだけを信じるようになれば、そこには異論との出会いや対話はない。

2020 年度以降、小学校から順次実施が

始まった新学習指導要領では、「対話的、協働的、深い学び」が理念になったが、地球温暖化、未知の感染症など、簡単に正解のない課題が山積しているのに、議論をするための共通の文脈（コンテキスト）を共有する場がなかなかない。その点、新聞には、新聞ごとの論調の違いや同じ新聞の中でも政治、経済、社会など各面の切り口の違いに気づけば、物事を多面的にとらえることができる。社会の多様性や未知のものとの対話の機会を作っていかなければ、異なる他者への不寛容が増え、「知らないこと」が「知りたくないこと」ことにさえなりかねない。紙の新聞を読めば、多様な考え方を通じて社会的包摂力がつくはずで、それを手ざわりのよいメディアと呼ぶこともできるだろう。読者側の感じ取り方も千差万別だからこそ、記事を読んだ一人ひとりが様々に社会に作用していき、世の中がさらに多様になる良い連鎖が生まれる。紙の新聞にはより強い公共性がある。

また、「フローとストック」という視点でも、24 時間繋ぎっぱなしのネットのフロー情報よりも、落ち着いて時間を止めて俯瞰できる要素が紙の新聞にはある。記事が同列に並んでいるように見えるデジタルメディアと違い、紙の新聞には、掲載面や各面の中での一番手、二番手と記事の重みづけ、価値判断が視覚化されている。見出しや要約、用語解説、図表や写真など、理解を助けてくれるナビが備わっている点も、世の中の文脈理解を助けている。「ファスト&スロー」の視点で言えば、紙の新聞をめくる時間は、常に情報をキャッチし続けなければいけないというスマホ生活の強迫観念・疲弊から解放される時間でもある。

さらに、紙の新聞からは、同時代性を確認してそれを記録していくアーカイブの価値への敬意もわく。紙の新聞は「今日」の

ニュースがパッケージになる。これがひと月、1年と蓄積することでアーカイブになり、未来に伝わっていくのだ。新聞協会は国立国会図書館と昭和28年から新聞マイクロ製作の共同事業を行っている。新聞各社の紙面からマイクロフィルムを製作、マスターネガフィルムを同館で、ポジフィルムを当館収蔵庫で、さらに各社がポジかDDと呼ばれる第2世代ネガフィルムのいずれかを保管しながら、後世に残している。国会図書館とは2021年度からデジタル長期保存の実験を始めることになっているが、対象にしているのは、あくまでも「紙面」である。

当館は、コロナ禍のなか、20年7月から9月末まで緊急企画展「新型コロナと情報とわたしたち」を開催した。今回のコロナ禍を伝える内外の新聞や、100年前のスペイン風邪など過去の感染症を伝える新聞紙面なども展示し、SNS時代の私たちの情報との付き合い方を検証した。戦後75年の展示も企画し、次世代への戦争伝承の活動を続けている。いずれも、紙の新聞の同時代性や記録性があるから、後世に伝えていくことができるのだ。

一本の記事が読者に届くまでに、多くの人が関わっていることも、紙面を通じて実感してほしい。多くの記者やカメラマンが取材し、デスクがチェックし、編集局内で価値判断し、広告を集め、紙面にそれらを組み上げ、事実確認や用字用語などの校閲作業をし、最新ニュースが入れば差し替え同じ工程をやり直して、人々が眠っている間、高速輪転機で印刷をして、全国約1万5000の新聞販売所に届け、約26万人の配達員が各家庭に届けている。

「思考する場」としての紙の新聞の意味も大きい。哲学者の三浦雅士氏は、『考える身体』で「情報を収集することと、もの

を考えることとは違う。ものを考えるためには、訓練が要る。その訓練は身体的修練だと思った方がいい」と書いている。紙の本や新聞を読むことの習慣化は五感を鍛え、思考につながると私は思う。

多くの人に読まれるための 取り組み

新聞界がいま、最も注力するのは、教育現場や子育て世代への働きかけである。世界中の新聞が長年、NIE（Newspaper in Education、教育に新聞を）と呼ぶ啓発活動に取り組んできたが、日本では今も、熱心に紙の新聞での活動が行われている。この手法を就活中の大学生や若手社会人用にNIB（Newspaper in Business）として展開する活動も広がっており、全国の新聞社にはこれらの担当部署がある（新聞協会のNIEサイト参照）。

新学習指導要領の総則には「新聞活用」がうたわれ、従来にも増して、小学校4年の国語、5年の社会（暮らしを支える情報産業）の単元で、「新聞づくり」「新聞を読む」「情報産業としての新聞」への理解を深めながら、読解力や情報リテラシーを学ぶ環境が整いつつある。中でも、「NIEタイム」という「朝学習」での活動が子供の読解力や社会的関心を伸ばすことが、全国学力テストの結果などで明らかになっている。週1回15分間、新聞をめくりながら記事を1本選んで切り抜き台紙に張り、要約と感想を書くこの演習を、全学年で継続して取り組む学校が増えている。新聞協会では、「新聞科学研究所」というプロジェクトのサイトを作り、様々な調査を通じて、新聞を読んで得られるメリットを数値でまとめ、企業関係者や子育て世代に分かりや

すく伝えている。

当館も、NIE と連携し各種教育プログラムを運営している（当館サイトご参照）。環境・科学教育と新聞活用の組み合わせを親子で体験するワークショップや、「まわしよみ新聞」という世代や属性を超えた新聞遊びのワークショップの場も企画している。星槎大の教員免許状更新講習への新聞活用講座の設置や学校図書館関係者との学校向け教材貸し出しキット作りなども定番化した。コロナ禍の中では、北海道博物館の「おうちミュージアム」に参加、学習動画も作成し、学校や家庭でできる新聞を活用した学びを提案している。これらはすべて「紙の新聞」に触れてもらう提案だ。

当館で様々な世代に紙の新聞体験をしてもらおうと、紙の新聞が、単に読解力育成だけでなく、自己承認、他者理解、持続可能な地域づくりにも有効だということがよくわかる。対話や協働をしながら未知の課題解決をしていくことは、主権者教育にもつながる。

過去には、新聞協会は 2004 年度から 14 年間、「ハッピーニュースキャンペーン」を展開し、放送作家の小山薫堂氏やアートディレクター森本千絵氏らにも協力いただき、心が温かくなる新聞記事を探して切り抜く体験を広めてきた。今は当館がこのコンセプトを引き継ぎ、「ハッピースクラップ帳」の活用を呼び掛けている。

現実を直視すると、紙の新聞に触れたことがない若い人が増えていて、そもそも、読み方がわからないという声も高まっているが、私たちは、毎日少しずつ、好きな記事から読むことを勧めている。習慣になると徐々に読む力がついてきて、知識がつく。たまった知識が土台になると世の中の様々なことと関連づけて理解できるようになり、社会の文脈がわかる。そして、きっと、

記事について誰かに話したくなる。当館で行う新聞のワークショップでは、必ずこの光景を目にする。ここに「手ざわり」があると思うのだ。3 年前の 3 月、NIE 実践教師の研究会で、千葉県の特別支援学校の取り組みを聞いたことがある。場面緘黙症の高校生が毎週、新聞をめくり気になった記事を見つけて感想を書く活動を続けたところ、ある日、教室の前に出て発表することができたという事例。後日、国語教育の専門家にこの話をしたところ、「新聞に出てくる言葉が、社会で共有、許容されているものだという安心感を与えたのだろう」ということだった。私はこの「社会とつながる言葉」の手ざわりを、多くの人に知ってほしいと思う。

人のつながりと協働をつくる

コロナ禍で、確かな情報の信頼性を求めて、新聞の電子版や紙面への接触は増えている。世代によって接するメディアや様式、内容が分断されている昨今は、人々が共通して社会の文脈を共有することは容易ではないが、コロナ禍を乗り越えるためにも、新聞を読み確かな情報を得て、特に紙の新聞を介して、人々がつながり協働し合えると信じている。

東日本大震災から 10 年が経過した。当館では、当時、岩手日報が 22 日間にわたって掲載した 5 万人分の「避難者名簿」の紙面 2 日分を展示している。同紙の記者たちは震災発生時に約 400 か所の避難所を回り、張り出されている避難者の名前を写真に収め、それを本社の記者らが入力した。名前に黒丸やカタカナも多い不完全な紙面ではあるが、家族や知人の安否を気遣う多くの被災者が、紙面の文字をなぞって読ん

だことだろう。26年前の阪神・淡路大震災の時は被災した神戸新聞の紙面を京都新聞が印刷代行し、東日本大震災でも同様に、宮城県の河北新報を新潟日報が、岩手日報を青森県の東奥日報と秋田県の秋田魁新報が、それぞれ印刷代行して、被災地の読者に紙齢を絶やさず届け続けた。石巻日日新聞のように、手書きの「号外」壁新聞を6日間作り続けた地域紙もある。まもなく関東大震災からも100年がたつ。読売新聞が新社屋の新築落成祝賀会の直後に被災するなど、東京紙の殆どが社屋を焼失したが、懸命に再建に努めた先人たちがいる。次の大災害時には、AIやデジタル技術がより人々をサポートするようになるだろうが、全国各地の新聞社には、いついかなる時も、伝えようとする人の思いと取材力と紙面に組み上げる力、それを支援するネットワークがあることを、ぜひ知っていてほしいと思う。

最後に、AIにはない「博物館というリアルメディア」の価値について触れさせていただく。博物館は、足を運んでもらって初めて成り立つ施設である。コロナ禍で臨時休館や開館制限を余儀なくされているが、五感を使って歴史や思索や身体に向き合える場所だ。1月6日の米国議会議事堂襲撃事件の際に、米国国立歴史博物館は、「何がどのようにして起きたのか、次世代がこれを記憶し文脈化する(contextualize)ために」といって、現場に遺されたものを収集した。

博物館は次世代が手に取るものを毎日記録し、守って伝えていく仕事をしている。収蔵庫に眠る古い新聞をみると、当時も今も、紙の新聞を囲む人々が記事に見入る時の喜怒哀楽の原点は変わらないのではないかと感じる。明治期には、街中に「新聞縦覧所」が作られ、人々が情報を求めて集ま

り、様々な新聞を読み合ったという。その紙の新聞の持つ温かさを、再び地域や家庭や職場に伝えていけるか、デジタル時代に大きな挑戦を続けていきたい。